

令和 6 年 7 月 26 日 市長定例記者会見 会見録

◆司会

ただいまから、市長定例記者会見を始めさせていただきます。
市長、よろしくお願いいたします。

◆市長

はい、よろしくお願いいたします。今日は 3 件です。東静岡のまちづくり関係のコンペ、それから難聴の関係、そして脳卒中の関係。もう一つ、駿河湾・海洋 DX 先端拠点化計画。これは、静岡市と静岡県が共同で内閣に申請していたものですけれども、事業採択されましたので、これについては 13 時から別途お話をさせていただきます。市と県と、そして静岡理工科大学、それから静岡大学、東海大学等が参加をして、合同で記者会見いたします。よろしくお願いいたします。まず、「まちづくりアイデアコンペ in 東静岡」の提案を募集するということです。東静岡ですね、非常に重要な地点になりますが、というのは静岡市の南北・東西の結節点にもあり、そして葵区・駿河区・清水区のほぼ中心ということになります。そして、JR と静岡鉄道が近接していて、交通も便利な場所になっています。これからアリーナの計画もありますけれども、アリーナはあくまで一つの中心となるものであって、大事なことはまちづくりだと思っています。そして、まちづくりは、市が勝手にこんな風にします、って作りではなくて、みんなでアイデアを出していただいて、こんなまちになったらいいよねというのをいろいろいただいて、その中でじゃあこんな風にしていきたいと思います、皆さんが共感を得られるような、こういうまちになったらいいなっていう共感が得られて、じゃあ、そういう将来像であれば一緒にまちづくりをしていきたいと思います、とさせていただくことが大事になります。

したがって、この「まちづくりのアイデアコンペ in 東静岡」というのを実施します。これはアイデアを出していただいて、最優秀賞だとかそういった表彰もいたしますけれども、そういった作品だけではなくて幅広くアイデアを、これからの「東静岡地区まちづくり基本構想」の案の中に取り入れていきたいと思っています。今日、コンペの募集概要を公表して、事前登録の受付を開始します。ぜひ、東静岡地区のまちづくりのアイデアをご提案ください。

今回の概要スケジュールですけれども、コンペでは、幅広い方々に参加いただけるよう、「都市デザイン部門」と「まちを楽しむ部門」のこの 2 つを設定します。都市デザイン部門は、どちらかと言いますと専門家の方々にいろんなアイデアをいただくということになります。まちを楽しむ部門は、地域でまちづくりの活動をされている方だとか、幅広く市民の方々にいろんな案を提案していただ

く、こんなまちになったらいいよねっていうこと、あるいはこんな活動ができたらいいいねっていうようなアイデアを出していただきたいというものです。一次審査、二次審査をした上で、二次審査まで進んだ作品については、公開プレゼンテーションを予定しています。12月8日でちょっと先になりますけども、幅広くアイデアをいただいて、厳正な審査の上、二次審査と言いますか、公開プレゼンテーションを12月8日にやる予定です。ぜひ、参加をお願いいたします。

それから次に、高齢者の「聞こえ」の確認の会の開催と、参加者への補聴器購入費用の助成を実施するというものです。これは、この後の脳梗塞も同じなんですけども、静岡市は、病気とか難聴とか、そういうことが発症してから対応するんじゃなくて、できるだけ早い段階でその兆候を見つけて、よく言うんですけど、早期発見・早期介入、あるいは早期治療ですね、これで発症そのものを予防したり、あるいは重症化予防していくということに、いろいろ力を入れております。糖尿病の問題も、以前発表いたしましたけれども、そういったことで今回は、一つは高齢者の難聴の問題ですね。もう一つは脳梗塞の問題です。これは心房細動を見て脳梗塞を予防しようというものですが、まず高齢者の聞こえの問題です。

これですね、高齢者の難聴は、聞こえにくさから会話とかコミュニケーションが困難になってくると、社会とのつながりが希薄になって、認知症や社会的孤立の要因になると言われています。65歳を超えると、聞こえづらさを感じる人が一気に増えて、75歳以上の約半数の方が聞こえづらさを感じています。表がありますけど、表は10年後の年齢別ということなので、このままが難聴の有病率ではないんですけれども、見ていただくと60～64歳の方だと12.6%であるとか、男性12.6%、女性10.6%、つまり10年後に難聴発症しているという率がかかなり高くなってきます。さらに65～69歳になると、ポンと43.7%とか、こういうレベルまで上がってきますので、このあたりで難聴について、しっかり認識をしていくことが必要だと思います。

難聴については、耳掃除や薬物使用、手術等で治る場合もあれば、加齢性難聴などで、補聴器で聞こえを補うことで、生活の質の改善もできる可能性があります。まずは高齢者の方々が難聴を自覚する、自分はちょっと聞こえづらいんだなということを自覚するということが大事になってきますが、なかなか自覚するということが困難になっています。したがって、難聴の早期発見・早期支援のために、高齢者の「聞こえの確認の会」というのを開催します。その上で、聞こえにくいという方には、補聴器の購入の費用の助成、その前に、まずは診察を受けていただいて治療というのがありますけれども、補聴器が必要だと

いう場合については、補聴器購入の助成をいたします。

まず、難聴の早期発見のため、市内にお住まいの 65 歳以上の方を対象に、8 月から 11 月までに全 20 回、市内のしぞ〜かでん伝体操や S 型デイサービスの会場など、あるいは商業施設イベントの会場などで「聞こえ」の確認をします。非常に簡単な確認で、機器を用いて「あ」とか「た」とか、そういった日本語の単語の聞き取りと簡単なアンケート調査、これで「聞こえ」がどうなっているのかというのを見える化するということです。不安な方には、医療機関の受診を勧奨するとともに、それで終わりじゃなくて、3 ヶ月後に電話によるフォローアップを実施して、いかがですかということで、「聞こえ」に不安のある方の発見で終わるのではなくて、確実に支援につなげていきたいと思っています。医療機関への受診を勧奨された参加者のうち、医療機関で補聴器が必要と判断された場合には、補聴器購入の助成、費用の助成を上限 3 万円ですけど行います。こういったことを、これからやっていきますので、難聴は、もうこれと付き合っていかなざるをえない、一生のパートナーですとしていますけども、付き合っていかなざるをえないので、ただし年だから仕方ないというのではなくて、自分の「聞こえ」に関心を持って、より改善につなげられればと思っています。初回は、8 月 20 日にエスパースドリームプラザで開催しますので、ぜひ参加をいただければと思います。予約も不要、参加費も無料です。以上が難聴の関係です。

もう一つは脳梗塞の予防になります。清水区脳梗塞予防実証実験、通称 S P A F S (エスパルス) への参加の呼びかけと。エスパルスと紛らわしいところがありますが、清水なのでそれにかけてエスパルスと呼んでいるわけですが、脳梗塞は、発症してしまうとなかなか、後、大変なことになります。先ほど申しましたように、静岡市では病気の発症前から早期に予防に取り組むということを重視しています。それが生活の質にとっては非常に大事だと思います。したがって、早期発見・早期治療・早期介入、それで発症予防・重症化予防をしていくということを、いろんな形で推進しています。この一つとして、2021 年度から、東京医科歯科大学と清水医師会と連携して、「清水区脳梗塞予防実証実験」を実施しています。脳梗塞の要因となる「心房細動」というのがありますが、それを測って、そして A I と予測技術を使って、脳梗塞の早期発見をしようというものです。この心房細動というのは不整脈の一種で、心臓の中で血栓ができて、これが血流に乗って脳に運ばれる場合は、脳梗塞を引き起こす場合があります。この心房細動を発見して、脳梗塞の予防につなげていこうとするものです。心房細動に起因する脳梗塞ですけれども、発症すると寝たきりになるリスクが非常に高く、社会復帰ができる確率が 20%以下と言われています。

したがって、心房細動の早期発見・早期治療が重要です。心房細動ですが、自覚症状がない場合も多くて、未診断の方が多くいると推定されています。この実証実験では、まず心電図を測定してA Iにより心房細動の発症リスクを判定します。発症リスクが中・高と判定された場合は、1週間のモニタリング検査によって、心房細動の有無の診断を行います。機械を持ってもらって1週間継続して測るということを行います。これで心房細動が判明した場合は、早期治療を施すというものです。

この実証実験で得たデータというのは、心房細動の発症と脳梗塞に関する研究に活用します。いろんな方の、いわゆるビッグデータですね、たくさんのデータを集めて心房細動の状況と脳梗塞の関係性というのが、データで関連性が明確になればなるほど、データが集まれば集まるほど、予測精度が高まっていきます。そういったことで、今回、実証実験で得たデータというのは心房細動の発症と脳梗塞の関係に関する研究に活用していきます。そして、多くの方に参加いただいて多くのデータを集めることが、発症リスクの予測精度の向上に貢献しますし、それが最終的には市民一人ひとりの健康長寿にもつながります。したがって、この心房細動のリスクが高まるとされる40歳以上の方は、ぜひ実証実験に参加していただきたいと思います。

参加の条件等を書いておりますけれども、非常に参加しやすくなりました。次のページの4のところに、より参加しやすい方法への変更ということですが、これまで、まず健康診断時に心電図測定をしますが、その後、心電計などのウェアラブルの機器をつけて、1週間モニタリング検査をするということにしました。したがって、参加者全員がこれをやるものですから、参加者の負担感というのは非常に強かったわけです。ただ、これまでの結果でA Iにより発症リスクが低いと判定された方は、その後の検出率は0.6%と低いことがわかりました。検出率というのは、脳梗塞になるところなのです。ごめんなさい、心房細動があるかどうかの検出率が低いということがわかりました。このため、A Iによる発症リスクが低いとされた方は除外する、後々の1週間のモニタリングは除外して、健康診断時の心電図測定で中・高リスクと判定された方のみ、1週間のモニタリング検査を実施するようにしました。したがって、まずは気楽に参加していただくことが大事ではないかなと思います。

この対象は清水区でやっていて、清水医師会と一緒にやっていますので、まずは清水区にお住まいの40歳以上の方を対象にしております。清水区以外の方でも条件が整えば参加可能ですので、ぜひ多くの方に参加をしていただきたいと思います。発表事項は以上です。ありがとうございました。

◆司会

それでは、発表案件につきまして、皆さまからのご質問をまずはお受けしたいと思います。ご質問のある方は、社名とお名前をおっしゃってからお願いいたします。

ご質問いかがでしょうか。よろしいでしょうか。では、発表案件については以上とさせていただきます。続きまして、幹事社質問に移りたいと思います。静岡第一テレビさん、よろしくお願いいたします。

◆静岡第一テレビ

はい、よろしくお願いいたします。静岡第一テレビです。第 71 回安倍川花火大会のシャトルバス運行中止についてお伺いいたします。今年は東京ディズニーリゾートのドローンショーに、去年の 2 倍以上となる約 1,500 の機体が多彩な演出で見物客を魅了したほか、約 15,000 発の花火が上がり、来場者は推定 57 万人と多くの観客でにぎわいました。

一方で、運転手の労働時間の規制が強化された 2024 年問題の影響で、今年はシャトルバスの運行が中止となる事態にもなりました。実際に花火大会を終えて、徒歩ルートマップやシェアサイクルなど対策について、どのように評価されていますでしょうか。また、改善点や来年度以降のシャトルバスの運行について、現状のお考えを教えてください。よろしくお願いいたします。

◆市長

ありがとうございます。安倍川の花火大会の当日ですが、新静岡駅・静岡駅などで徒歩ルートマップというのを配布しました。また、駅から会場へ向かうまでの道のりにある、道沿いにある新通小学校で、ダッフィーバスの展示を行いました。歩く楽しみを置くことによって、より楽しく歩いていただくという試みです。もう一つは自転車です。自転車については、シェアサイクルのパークルを活用しましたが、大会本部として駐車（注：駐輪）スペースを拡大して、近くにおける台数を増やしました。

今回はシャトルバスの運行を廃止するという苦渋の決断を大会本部でされましたけれども、結果として事故もなく、また歩行者の大きな滞留や混乱もなく、無事開催された点については評価できていると考えております。近隣の商店街の方々からは、徒歩での来場者が増えて店舗に立ち寄ってくれる人も増えたと聞いております。バスがないため、当日も暑い天候で大変だったと思いますけれども、なんとか事故もありませんでしたので、これはこれで良かったなと思っています。

来年度以降のシャトルバスの運行については、今回の結果を踏まえて大会本部、

関係機関と協議を進めながら、これから検討していきたいと思っております。
まだ、どういうふうにやっていくかという方針は決めていないという状況です。
ありがとうございました

◆静岡第一テレビ

ありがとうございます。

続いて、県と大井川流域市町の首長との意見交換会についてです。リニアの関係ですが、鈴木知事は先月ＪＲ東海と山梨県の三者で県境付近でのボーリング調査実施に合意するなど、リニアの推進の姿勢を就任以降、示されています。こうした中、今月 23 日には大井川流域の首長との意見交換会が実施されました。終わった後には、知事から補償に関して、県とＪＲ東海に加えて、国を含めて文書に残していかないといけないという考えが示されたりですとか、流域市町の首長からはスピード感についていけないなど、密な連絡や連携を求める声も上がっていました。今回の意見交換会を難波市長はどのように見られているか、そして、今後どのような影響を与えるものと考えているのか、教えてください。

◆市長

知事と首長、市長同士の自由な意見交換というのは、非常に大事だと思います。お互いの認識を確認するという点で、今回行われた意見交換会は非常に重要な機会であったと思っています。

その一方で、今回、大井川流域市町の首長との意見交換という形で発表されていましたが、静岡市も流域市町なんですよ。流域市なんです。なんで静岡市が入ってないのかなと、私は率直に疑問に思いました。利水している 8 市 2 町というのがありますが、それに加えて、静岡市、大井川から流水している 8 市 2 町に加えて静岡市は流域そのものですので、したがって、これからは一緒に意見交換に参加できればいいかなと思っています。

今回の意見交換に参加された流域市町の首長さんからも、静岡市を入れるべきとの意見が出されたと聞いています。したがって、今後の意見交換会は、いつ開かれるのか分かりませんが、静岡市も入れた流域市町ですね、あるいは利水団体もありますから、そういった方々も入れた形で意見交換が必要ではないかなと思います。したがって、意見交換会の翌日に県へ申し入れをしました。その内容は、『今回は知事と大井川流域市町の首長との意見交換会ということでしたが、この意見交換会のメンバーには流域市町である静岡市も含めて行うことが望ましいと考えます。ついては、県と静岡市を含む流域市町、そして、利水団体の皆さんとしっかり情報や意見交換を共有できる場の設定をお願いする』ということ、これは口頭ですけど、申し入れをいたしました。

これについて鈴木知事から回答がありました。ちょっと読んでみますと、鈴木知事からの回答は、『選挙戦を通じて大井川中下流域の住民の方々が、リニア工事に伴う水資源の影響を大変懸念されていることを実感した。このため、これまで大井川の水資源問題について協議を重ねてきた大井川中下流域の 8 市 2 町の首長の皆様となるべく早くお会いし、直接ご意見を伺いたいと考え、今回の意見交換会を開催ところである』と。『なお、23 日の意見交換会の中で、静岡市との情報共有を求める意見もあったことから、今後は静岡市を含めた意見交換会の開催も検討していきたい』ということですので、次に行われる場合は静岡市も含めた形で、どういう形かわかりませんが、少なくとも静岡市を含めた形で行われるということを期待しております。以上です。

◆静岡第一テレビ

すいません。その申し入れに関しては、難波市長から鈴木知事に直接ということではない…。

◆市長

そういうことではなくて、織部さんが言ってくれたんですね。はい。

◆静岡第一テレビ

ありがとうございます。幹事社からは以上です。

◆司会

それでは、幹事社質問に関連したご質問をお受けしたいと思います。ご質問いかがでしょうか。静岡朝日テレビさん、お願いいたします。

◆静岡朝日テレビ

静岡朝日テレビです。リニア問題に関連してなんですけれども、意見交換会の場で、一部の首長さんから、鈴木知事のスピード感について不安を抱いているとも取れるような発言がありました。難波市長は、鈴木知事のリニア問題に対するスピード感については、どのようにお感じでしょうか。

◆市長

すいません。その日の会合の中身、ちょっと全部把握していないので、どういう意見があったのかちょっとよく分かっていないんですけども、スピード感に懸念があったということですけど、スピードを持ってやるというのはいいわけですから、いいと思いますが、そこで説明のところでしょうかね、山梨県と J R

東海と静岡県で三者合意をされた時の内容が、十分確認されていなかったんではないかというような心配もあったようですから、そういったことを他の首長が心配して、やっぱり、もっときっちり確認した方がいいんじゃないか、ということをおっしゃったんじゃないかなと思います。先ほどちょっと話がありましたが、鈴木知事は文書を持って、いろんな確認をしていった方がいいということをおっしゃっていたそうですので、そういった点でも丁寧な説明と、あるいは確認すべきことは、やはり文書できっちり確認していくというのが大事ではないかなと思います。それはちょっとスピード感とは関係ない話だと思いますね。スピード感を持ってやりながら、確認すべきことはきっちり確認する、それから、丁寧な説明を心がけることだと思います。はい。

◆静岡朝日テレビ

スピード感で言うと川勝県政のときは、なかなかスピード感がないんじゃないかっていうような声も聞こえてきました。早くやればいいという問題ではないと思いますけれども、難波さんの中で考える適切なスピード感というか、どういうペースでやるのがいいとお考えでしょうか。

◆市長

科学的根拠に基づいて詰めていくということですので、これは一定の時間はかかると思っています。ただ、みんな一生懸命努力してやっているわけですから、そこを加速して、そして、やはり根拠に基づく議論をする必要があると思います。何かあったことに対して根拠に基づかないで、懸念を表明するというような場面も何回もありましたので、なんでそういうことをおっしゃっているのかよくわからない、というようなこともありましたので、それはお互い様ですけども。お互い様というのは、行政が説明する場合においては、やはりきっちりとした説明をする、根拠を持ってきっちりとした説明をする。そして、あるいは疑問が…、ごめんなさい、これでいい、この方向でいいんだということであれば、なぜその方向でいいかということについて、根拠を持ってしっかり説明する。その一方で、これは不十分じゃないかという意見があるときは、なぜ不十分かということを明確にして、感覚的に不十分だというんじゃないくて、こうこうこういう点がわからないので、ここをちゃんと詰めていかないと、よくわからないですねっていうことを伝えるということが大事だと思いますので、とにかく根拠に基づいた議論を丁寧に、かつ誠実にやることが一番大事で、それが結果的にスピードに繋がると思います。

スピード感ということで急いでやるということではなくて、きっちりやればおのずと速度は上がっていく。きっちりと言いますか、誠意を持って、いわゆる

いちゃもんとか難癖をつけるんじゃないくて、ちゃんとした根拠に基づいた議論をすれば、おのずとスピードが上がってくると思っています。

◆司会

はい、その他いかがでしょうか。静岡新聞さん、お願いいたします。

◆静岡新聞

静岡新聞です。先ほど難波市長のリニアの意見交換会に関する回答のところの確認なんですけども、鈴木知事から、静岡市が申し入れたことに対し、鈴木知事から回答があったということなんですけど、これは何日に回答があったんですか。

◆市長

これは何日ですか。

◆環境政策監

昨日です。

◆静岡新聞

昨日。これ、県からの回答っていうのは文書っていう形であったんですか。

◆環境政策監

メールでやりとりしています。

◆静岡新聞

鈴木知事からということで、メールで回答があった。

◆市長

鈴木知事はこう言っていますという形でメールがあったということですね。くらし環境部からですね。

◆静岡新聞

はい。あと、このリニア問題に対してＪＲ東海と地元が対応するという、その組織として、大井川利水関係協議会、大井川利水協があって、そこに利水団体も入っているんですけども、この団体の中に静岡市が加わってこういうようなお考えってのはあるんですか。

◆市長

それはないですね、ないです。

◆静岡新聞

協議会とは別に。

◆市長

協議会とは別に、はい。利水っていう名前がついていますので、静岡市は大井川の流域市町ではありますけども、利水自身は行っていないので、利水団体ではないわけですね。

したがって、その利水のところには入らない、静岡市は加わらないで、別途、流域の市として入っていくということになります。あるいは流域というよりも、リニアが通る場所というのは静岡の市域の中にありますから、そのリニアが通る直接利害関係のある団体として加わっていく、県との意見交換会に加わっていくっていうことが、いいんじゃないかと思っています。

◆静岡新聞

最後、確認なんですけども、静岡市は大井川の水の利水はしてないっていうことなんですけど、この井川地区では、大井川水系の地下水を飲料水とかで利用しているんじゃないかなかったですたっけっていう…。

◆市長

そうです。ただ大井川の水を直接使っているわけではないという意味ですね、はい。

◆静岡新聞

わかりました。

◆市長

大井川水系ではありますので、水系と流域は同じ意味ですので、水系にはあるわけなんですけども、利水という形で明確に川から水を引いて使うということをやっていないので、そういった点で、ちょっと立場が、他の8市2町とは違うと思っています。

◆司会

はい、その他いかがでしょうか。幹事社質問に関連したご質問、その他よろしい

…。NHKさん、お願いいたします。

◆NHK

はい、NHKです。お願いします。今のリニア関連でちょっと追加で確認なんですけども、この会議の今回の流域の流域自治体との意見交換会自体は、開催自体は事前から告知されていたものでしたけども、開催前には参加したいといった旨の申し入れをされたんですか。

◆市長

いや、これですね、流域ではなくて、利水 8 市 2 町と思い込んでいたものですか、我々。それで県がおやりになるので、ああ、そういうことですかと。つまり、中下流域の水の問題だけであれば、それは中下流域の 8 市 2 町やるというのは当然なので、ですから、そういう会議をやるんですね、という認識でした。

ところが、会議が開催してみると大井川流域市町との意見交換になっているので、あれということですよ。それだったら、静岡市も入っても、入るべきではないかなということです。

◆NHK

わかりました。そういった意味で、ある意味ステークホルダーの一つ、1 人であるから、当然参加すべきであろうということですよ。

◆市長

そういう意味では、そうですね、実は、今、静岡市がやっていることについて、先ほどの 8 市 2 町にも説明、我々できてないんですね。あくまで今は、県とも十分な意見交換もできていませんけど、同じように 8 市 2 町ともできていないので、そうすると、その場面をどうしても静岡市としても、やはり持つていく必要があるなと思っていますが、そのときに、県がまた 8 市 2 町とやり、市が 8 市 2 町とやり、また県と市が意見交換をやって、これも混乱しますので、できれば県と市ですね、環境影響評価の方法書が送られてきている直接の利害関係団体というのは、静岡県と静岡市ですので。ですから、環境影響評価について非常に細かく、いろいろ見ているわけですよ。それとともに、今度は中下流域の利水の 8 市 2 町、あるいは利水団体の方々、そういった方々と一体となって、何らかの形で認識を共有していくっていう、状況を共有していくっていう場面は必要ではないかなと思っています。

◆NHK

すみません。今のご回答ともちょっと重なる部分あるんですけども、もし参加されていたら、こういうことを言いたかったとか、こういうことを伝えたかったという部分は、こういったものを想定されたんでしょうか。

◆市長

今、静岡市がやっている燕盛土と、燕のところの盛土の検討状況、それから南アルプスの生態系、沢の流量の減少等で生態系に影響が出ますので、その生態系への影響についての今の検討状況、あるいは影響の回避低減方法と、あるいは代償措置の関係、その辺りがこんな状況まで進んでいますよってというような説明ですよ、それをするということが必要だと思っています。

◆司会

はい、その他、いかがでしょうか。幹事社質問に関連したご質問は、以上ということよろしいでしょうか。

では、その他のご質問をお受けしたいと思います。その他、ご質問ある社はお願いをいたします。いかがですか。はい、中日新聞さん、お願いいたします。

◆中日新聞

中日新聞です。先日の会見でもちょっと話題に上がりました、清水区の学校給食について伺います。前回の会見で、市長は船越地区へのセンター建設について、ゼロベースで見直しを進めているとの発言がありましたが、その関連で伺います。市はですね、昨年度、2023 年度に船越地区に適した、センターに適した土地を見つけたとして、2,300 万円を予算計上しています。これは調査費ということなんですけども、この調査によって、どのようなことがわかったのでしょうか。お願いします。

◆市長

はい。これは経緯は、まず 2022 年度に清水の船越地区に清水区を配食エリアとする 1 万食の学校給食センターを整備する方針というのを、意思決定をしました。それを踏まえて、昨年度、2023 年度に、清水地区学校給食センター整備基礎調査というのを実施しました。これは、給食センターに関わるいろんな法令の整理であるとか、それから、これまでの給食センターの機能だけに限らず、市民の皆様は給食に親しみをもちたいというための食堂を併設するとかですね、地震が発生した場合の一時避難所としての機能だとか、複合的な機能を有する給食センターというのがあるんじゃないかということで、他の自治体の事例

などを調査しました。それでわかったことってというのは、新しい給食センターというのは、どういう機能を持つべきか、ということについての整理をしたということです。

その一方で…、そこまでいいですか。経緯で、その後も。

はい、その一方で、先ほどの給食センターの整備の白紙という話がありましたが、正確に言うと船越地区に給食センターを整備するのを白紙としたのではなくて、静岡市の給食、静岡市全体の給食センターの供給のあり方ですね、これをもう白紙といいますか、ゼロベースから見直すということにしました。昨年 4 月に私が市長になって方針を変えました。なぜかという、児童生徒数が今、急激に減ってきています。昨年、1 年間に生まれた数ですね、例えば、今年 20 歳になった人は 6,000 人いましたけども、今年の 6 月より前の 1 年間で生まれた子どもの数は 3,500 人になっています。したがって、急速に子どもの数が、生まれる子どもの数が減少してきているので、そうすると将来、給食の配食数というのは相当減ることが予想されます。したがって、将来の児童生徒数の推計をしっかりと再推計をして、その上で清水区の供給だけではなくて、葵区・駿河区・清水区を、全部を含めた市全体の学校給食のあり方を見直していかないといけないということにしました。したがって、その検討を今しているところです。要は全体の需要量、どのくらいの、例えば 10 年後にどのくらいの給食数を供給しないといけないか、そのためには、どこにどれだけの給食センターが必要かあたりについて、それを一から 見直し、ゼロベースで見直していくということをしています。

その一方で、もう一度、先ほどの新しい清水の給食センターに戻ると、元々は全体のことを考えなくて、今の清水で給食を配給している、配食をしている東部学校給食センターと、それから単独調理校と言っていますけど、その全体について、今度の新しいセンター、清水地区の学校給食センターが担うという考えでやっていましたので、それは全体最適にならない、清水のことだけで考えているので。したがって、仮に新しく給食センターを造るにしても、その給食センターがどこに配食するかということは、これはもうゼロベースで考えるということになります。そんなことで、給食センターの見直しをしているという状況にあります。

◆中日新聞

ありがとうございます。単独調理校、いわゆる自校式なんですけども、市長はちょっと難しいんじゃないかと前回おっしゃっていましたが、公平性の観点から自校式を維持していくことは考えにくいともおっしゃっていましたが、清水区の小学校だけを見ると、中学校はほとんどがセンター式なんです

けども、小学校だけで見ると 27 校中 19 校が自校式です。残りの 8 校も蒲原や由比はセンター式とは言えるものの、近隣の小中学校 1、2 校へ数百食規模を配送する、いわゆる親子式だと思います。それで、この親子式については、市長はどのようなお考えをお持ちでしょうか。

◆市長

親子式は、近隣で、例えば、由比・蒲原であるとか、近接したところで合理性がある場合は、親子式というのはあり得ると思います。ただ、旧清水市にあるようなところですね、そういうところは学校がかなり連続といいますか、まとまった数の学校は清水区内にありますから、その中で親子方式でやるのではなくて、これはセンター方式でやる方がいいと思っています。

例えば、例えば、というよりも、今の単独調理場、どれも施設整備の老朽化が著しいので、衛生上の観点からも造り直さないといけないでしょうし、それから植物アレルギーを抱える子どもさんもありますので、それに一つひとつ対応していくというのはなかなか困難ですので、やはり全体でセンター方式で配食していくというのが望ましいと思っています。

単独調理場の利点として、温かくて美味しい給食の提供というのは言われているんですが、お気持ちはわかりますけども、単独調理場でなければ美味しいものができないのかっていうことですね。それは、そうではないと思いますので、センター式でも美味しく提供できるような方法を考えていくのが必要だと思っています。

◆司会

はい、その他、いかがでしょうか。静岡新聞さん、お願いいたします。

◆静岡新聞

静岡新聞です。よろしくお願いします。ここ最近といいますか、年度変わってから、いわゆる不適切な事務処理ということで、市が公表している数が多いかなというふうにちょっと感じているんですけども、5 月の会見で 4 件まとめて発表されたときに、市長は組織風土にも問題があるという話をされたと思うんですけども、改めて、この事故の多発というか、している原因をどのように考えているかということと、こういうのを受けて再発防止として、市として何か新しく、こういう研修なりをやっていくとかっていうお考えはありますでしょうか。

◆市長

はい、この不適切な事務処理が多数発生しているというのは、大変申し訳なく思っています。

私、去年の4月になって、かなり件数が多いもんですから、これ多いなと思っ
ているんですけども、さらに過去を遡ってみると横ばいなんですね。したがって、
大変驚くべきことではありますけども、このぐらゐの事務事業事故は、毎年発生
しているというのが実態ということになります。これですね、ミスというのは
必ず起こるんですね。ですから、ミスをゼロにするということは、なかなか
できませんが、見ているとやっぱり組織的なチェックができてない、担当者が
うっかりってというのはしょうがないんですね。必ずあることなんですけど、これ
をよく言うダブルチェックだとか、そういうチェックをするシステムができて
ないと思っています。

前もちょっと言ったことがありますけども、来たときに驚いたのは、未だにハンコ
で決裁をしていて、ハンコが20近くついているっていうことですね。そうい
うのを見て、ハンコが20つくということは、ほとんど見ていないっていうこと
ですよね。つまり、多くの人が見れば見るほど、誰かがチェックするだろうと
いうことで、本気でチェックをしないということになります。

したがって、関係ない人までハンコを、関係ないといいますかね、関係がない
ことはないんですけども、チェックをしない人にハンコを回しても意味があり
ませんので、本当に、この問題について、例えば、しっかりチェックできる人が
チェックできるという体制をしていくっていうことが大事だと思っています。
その点で組織的なチェックを全庁的に徹底するということで、かなりやって
いますけども、まだまだ起きていますので、ずっと継続的にやらざるを得ない
ですね。組織として、そういう、よく組織風土というと、何でも組織風土の
せいにするのかと言われますけども、それはやっぱりそのやり方なんですね、
仕事のやり方がそうなってしまっているんで、そこを変えていくということで
今、一生懸命やっているところです。少しずつは減ってくると思いますけれども、
とにかく継続的に、しつこくしつこく取り組んでいくことが必要だと思っ
ています。

◆静岡新聞

ありがとうございます。ハンコが20個あったのが1年前驚いたって話で、それ、
多少改善なり…。

◆市長

それは、相当改善されていますね、はい。

◆司会

はい、その他、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。では、以上で本日の記者会見を終了させていただきます。

◆市長

ありがとうございました。

◆司会

ありがとうございました。次回は 8 月 9 日、金曜日、午前 11 時からの予定となります。